



仲間を創る「会話」と グローバルにつながる「対話」 バフチンの対話理論

「1」 バフチンとは

ロシア(旧ソ連)で一九二〇年代以降に活躍したM・M・バフチンのいわゆる「対話理論」は、今日においてもなお、学習者間の交流を重視する心理学界・教育学界の研究者の間で国際的に高く評価されている。バフチンの理論は、異質な活動文脈を背景とする人々との交流可能

性を重視したものであり、多くの学習者が将来、グローバルな現場で働くことになる現代の学校教育の在り方を考える上で有効と言える。本稿では筆者が研究を進めてきたバフチンの議論を視点とした交流の特性モデルを紹介し、異質な世界に開かれた子供たちの交流能力を促進し得る学級経営の在り方について示唆を行う。

なお、本稿で紹介するモデル事例は、

引用元の論文から一部改変して引用している。



田島充士

東京外国語大学准教授

「2」 仲間内で閉じられた 交流における自動化

私たちは、日々、多くのことを交わし合いながら生きています。しかしこのことを介した交流の特性は、話し手と聞き手との関係によって大きく異なる。ま

プロフィール

高知工科大学・専任講師を経て現職。博士(心理学)、学校心理士およびガイダンスカウンセラー。日本教育心理学会『教育心理学研究』常任編集委員、日本読書学会理事、『読書科学』編集委員。バフチン及びヴィゴツキー理論を主な視点として学校教育を対象に研究を進める。

ず過去に経験を共にし、話題に関する多くの情報を共有すると期待できる話者同士のやり取りを見てみよう（田島、二〇一三）。

A…ロータリーつき、高回転域まで一気に回って気持ちいいらしいぜ。

B…うん。でもセブン持つてる先輩の話

だと、低速トルクがスカスカで、下手なヤツが運転するとすぐにエンスト起こすらしいな。

ここで使用されている用語の多くは、自動車産業に関わる人間ではない限り、意味をなさないことばだろう。しかし、自動車マニアのA氏とB氏にとっては常識的な知識であり、それを自動的に受け入れることで、多くの前提情報がカットされた交流になっている。バフチンはこのように、話者が使用する言語の意味内容をいちいち考えずに使用できるようにする現象を、話者の言語認識の「自動現象／自動化」と呼んだ（田島、印刷中）。

自動化は、特定のことばの意味を共有し、共同で文化的な実践を行う集団（本稿ではこの集団を「文化的集団」と呼

び、また構成する人物を「仲間」と呼ぶ）を創出する機能を果たす。しかし彼らと情報を共有しない、異質な文化的集団に属する人物（本稿では「他者」と呼ぶ）にとって、彼らが操作することばの意味を理解することは困難である。その意味でこの種の自動化が顕著な交流は、仲間の間にだけ通用することばを扱う「閉じられた」ものになっている。

他者に開かれた交流における異化

[3]

なお交流の特性が決まる上で、話し手がもたらすことばの情報だけではなく、その情報に対し、聞き手が同意して素直に受け入れるか（本稿では「肯定的評価」と呼ぶ）、それとも批判するか（本稿では「否定的評価」と呼ぶ）という評価の要因も関わる。

例えば、「この車の性能は二八〇馬力だ」という情報に対し、聞き手が「なるほど」と納得したり、「分かった」と受け入れたりする。これは聞き手が、この情報に対して肯定的な評価を下したことを示す。その結果、話し手は聞き手の応答に対し緊張することなく、また、自分の発する情報に対して振り返ることも少

なくなる。話者の言語認識の自動化が進むパターンである。

一方、この情報に対し聞き手が「トラックならともかく、一般の乗用車にそんな馬力は必要ない」などと批判することもある。これは聞き手が、この情報に対して否定的な評価を下すことを示す。その結果、話者は聞き手の応答に対して緊張し、発話内容を多面的に再検討せざるを得なくなる。バフチンはこのような解釈作業に伴う現象を、話者の言語認識の「異化」と呼んだ（田島、印刷中）。

以下の交流は、情報を共有せず批判的な評価を下す他者とのやり取りを示す（田島、二〇一三）。他者であるC氏を相手にするD氏は、複雑な構成による言語を駆使し、相手に伝わる発話を構成するように努めている。

C…ニュースで、ロータリーエンジン開発の話聞いたけれど、普通のエンジンと何が違うの？

D…通常のエンジンは、ガソリンガスの爆発によって生じたピストンの往復運動をいったんクランクと呼ばれる機構を通じ、タイヤを動かすための回転運動に変換しているんだ。だけど、ロー

タリーエンジンは、大型のおむすび型のローターを直接、回転させているから、その運動がそのままタイヤの回転運動になるんだ。

C：でも、そのような特殊な構造を持つことで、何かいいことはあるの？ 通常のエンジンと比べてメリットがなければ、そんな構造は不要では？

D：クランクでの運動の変換がない分、アクセルを踏み込んだときのエンジン回転数の上がり方がスムーズだから、スポーツカーなどスピードを競う車には有利な点が多いかな。

C氏の批判的な質問を受けて返答したD氏の発言内容は、自動車に詳しくはない第三者が聞いてもある程度、理解できるものになっている。その意味でこの交流は、先述のA氏とB氏による、「閉じられた」交流と比較して、他者にも通用する「開かれた」ものになっている。

パフチンのいう「対話」はこのような、特定の文化的集団に属しながらもなお、他の文化的集団の成員（共有情報がなく否定的評価を行う）に対して自分の意志を伝え、また自分の発言に対する相手の質問に応じることによって成立す

る、話者の言語認識の異化を伴う交流を示すと考えられる（田島、印刷中）。

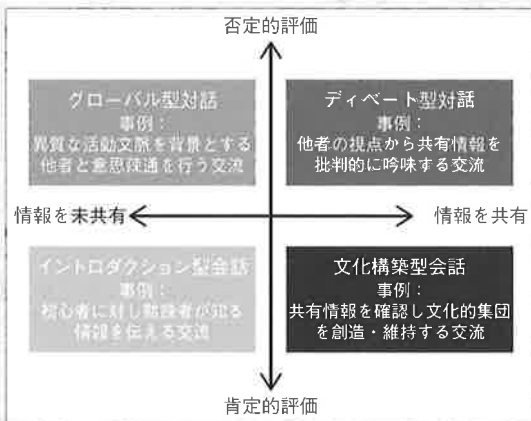
[4] 教室において展開され得る「対話」と「会話」

田島「印刷中」の成果を生かし、情報の共有／未共有の契機を横軸に、評価の肯定／否定の契機を縦軸に設定し、教室において展開され得る交流を四特性に分類したのが、以下の図である。なおパフチンが「対話」と呼ぶ交流と区別するため、話者の自動化を促進する交流を「会話」と呼ぶことにする（対話と会話の区別は、平田「二〇一二」の分類も参考にしている）。

以下、それぞれの交流について解説する。

「イントロダクション型会話」は、仲間となるべき初心者への聞き手に対し、熟練者が知る情報を教える交流である。典型例としては、教員によって実施される講義型の教授が挙げられる。情報を共有し仲間になろうとする聞き手は、話し手の発言を肯定的に評価することが前提であるため、話し手が自らの発言について異化的に考えることはない。

図 教室において展開され得る交流の四特性



「文化構築型会話」は、共有情報を確認し、文化的集団を創造・維持していく交流である。典型例としては、「面白い！」「楽しい！」などの肯定的な評価とともに共有知識の意味が確認され、それらの意味に対する自動的な処理が加速化していく仲間との交流が挙げられる。自動車マニアA氏とB氏の交流も、この会話に該当する。

「ディベート型対話」は、異質な文化的集団に属する他者の視点を想定し、共有情報を批判的に吟味して多面的な解釈を行う交流である。典型例としては、授

業で学んだ知識を批判的に解釈し直すデ
イスカッションが挙げられる。この場
合、共有知識に対する話者の認識の異化
は進む。

「グローバル型対話」は、他者に向け、
自分たちの学んだ知識を介して意思疎通
を行う交流である。典型例としては、他
者を相手に学習成果を実際に発表するプ
レゼンテーションと質疑応答が挙げられ
る。ロータリーエンジンに関するC氏と
D氏の交流は、この対話に該当する。異
なる文化的背景をもつ人々と実際につな
がる、もつとも異質な交流である。

なお、ここで紹介した交流の特性はあ
くまでもモデルであり、実際の交流に
は、多くの中間的特性が見られると考
えている。

[5] グローバル型対話を 展開可能とする学級の経営

教室において、会話も対話も大事であ
ることは言うまでもない。会話を通して
学習者は、情報とそれに対する肯定的評
価を共有する文化的集団の構築と維持を
行う。一方の対話では、共有情報を、他
の文化的集団に属する他者とのネットワ

ークづくり志向する活動に使用する。
そして生産的な対話は、豊かな会話経験
を基盤に成り立つものと考えている。

ただし、多くの場合、本物の他者がい
ない教室の中で対話を展開することは容
易ではない。結果として、教室の交流が
会話に終始してしまふ事態は大いにあり
得る。一方、筆者が行った授業研究で
は、学習者が「他者の立場に立つてみ
る」という介入手法が、教室内の交流を
対話にしていく上で効果があることが分
かっている。実践の詳細については、田
島「印刷中」をご参照いただきたい。

なお、この対話力の育成を行う上で、
教室内の人間関係を十分な信頼感を伴う
ものにする介入は必須と考えている。否
定的評価が前提となる対話は、話者の間
に信頼関係が構築されていなければ、相
手の意見に対する不毛な非難合戦や、言
語化能力が高い者による一方的ないじめ
などに発展するリスクもある。教室にお
いて生産的な批判を伴う対話が展開して
いくためには、教員が日頃から、否定的
な評価の価値を学習者に示し続け、また
その人間関係における信頼の構築に努め
なければならぬ。

まだ研究段階ではあるが、大阪教育大

学附属天王寺小学校の教員らとの研究協
議・研究授業の実施を通し、子供たちが
否定的な評価について「批判的な意見を
もらうとより深く考えられるからうれし
い」「単に褒められるより問題点を言っ
てもらった方が自分のためになる」と価
値付ける、信頼感を伴う学級経営の展開
可能性について手応えを得ている。日頃
の学級経営によって醸成される学習者同
士の固い信頼感により、グローバルにつ
ながり得る対話の展開も可能になる。対
話を促進するための学級経営の在り方に
ついては、今後も研究を進めていきた
い。

(たじま・あつし)

【引用文献】

- ・平田オリザ (二〇一三) 「わかりあえない
ことから—コミュニケーション能力とは
何か—」講談社
- ・田島充士 (二〇一三) 「異質さと共創する
ための大学教育—ヴィゴツキーの言語論
から越境の意義を考える—」『京都大学高
等教育研究』第一九号、七三—八六頁
- ・田島充士(編) (印刷中) 「ダイアローグの
ことばとモノローグのことば—ヤクビ
ンスキー論から読み解くバフチンの対話理
論—」福村出版